

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00582

研究課題名(和文) 英語の話しことばにおける機能語類連鎖の働きに関する基盤的研究

研究課題名(英文) Studies on the way function word sequences work in English spoken language

研究代表者

澤田 茂保 (Sawada, Shigeyasu)

金沢大学・外国語教育系・教授

研究者番号：00196320

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「機能語連鎖」という理論概念を新規導入し、話し言葉での働きを探ろうとするものである。2021年度では、機能語/内容語の定義について先行文献を探してみたが、なかなか難儀する課題であることが分かった。この区分は、結局のところ、観察に基づいて便宜的に設定せざるを得ないものである。2022年度は、「品詞」と「出現頻度」による折衷的基準で機能語類連鎖を定義して、『話しことばでの機能語類連鎖の働きについて』の論考を表した。2023年度は澤田(2016)での論考と関連つけて、話しことばに遍在する顕著な四つの特徴が機能語類連鎖に依拠するものであるとして論考を著した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、機能語類連鎖という新規概念を導入して、生成文法論などの普遍主義的言語観に対するアンチテーゼである定型性研究に、定型性を捉える基準について、一つの方向性を与えたことである。社会的意義は英語教育に関するものである。コミュニケーションを教える時代においては、文法教育を軽視せず、話し言葉には話し言葉に固有の文法的な制約や仕組みが存在すること、それを踏まえて教育を行なうことの啓発に資することである。

研究成果の概要(英文)：This study aims to introduce a new theoretical concept called "functional word sequences" and explore their role in spoken language. In the 2021 academic year, I attempted to investigate previous literature for the definitions of functional words and content words, but found it to be a particularly challenging task. Ultimately, this distinction must be made, based on observation, for a convenient purpose. In the 2022 academic year, I defined functional word sequences using a hybrid criterion based on "parts of speech" and "frequency of occurrence," and published a study titled "On the Role of Functional Word Chains in Spoken Language." In the 2023 academic year, referring to Sawada (2016), I authored a study asserting that the four prominent features pervasive in spoken language rely on functional word sequences.

研究分野：英語学

キーワード：話しことば spoken language 機能語連鎖 TOEIC文法論

「様式C - 19、F - 19 - 1(共通)」

## 1. 研究開始当初の背景

生成文法論の言語観では、人は自分の意思を伝えるために自由に(創造的に)言語を産出する、とされている。そして、言語の最小単位である「語」(レキシコン情報)とその配列のルール(統語規則)で言語形式を生み出し、その生成力には制限がない、と仮定する。人が生み出す思考には制約がない、故にそれを表示する言語の生成力に制限があるはずはない、というわけである。この言語観の根幹には、言語能力は普遍的で、言語獲得での学習・経験の役割は最低限であるはずだ、という思想がある。だが、これは理想化された状態での思念的な言語使用を想定してのことである。人の日常的な言語使用を観察すれば、同じような語連鎖が繰り返し現れたり、以前に経験・学習したと思われる表現を使い回していることが分かる。後者の実態を言語の formulaicity(以下「定型性」という。

本研究はこのような意味での言語の定型性研究の一つである。定型性研究は大規模なコーパスを利用して、実際の言語使用では新規の表現にあふれているというよりも同じような表現が繰り返し使用されており、定型表現は遍在的であることを明らかにしている。(例えば、Biber et al. (1999)は、lexical bundles は会話で 28%、学術文で 20%であると述べているし、Erman and Warren (2000) は、formulaic sequences は話しことば(spoken language/SL)では 58.6%、書きことば(written language/WL)で 52.3%である、という)それぞれ算定の基準や対象データが違うので単純に結論できないが、定型的表現が実際の言語使用で広範囲に存在していることは否定しがたい。この事実の発見は、言語表現が「語」からその都度構成されるだけでなく、語を越えた大きな単位(句、節及びその断片)がそのまま学習・記憶されて、言語使用者はそれを場面に応じて利用しているのではないか、ということ強く示唆する。定型性研究には学習・記憶の役割を積極的に認める思想が根底にあり、その点でも生成文法論が掲げる普遍主義的言語観と好対照をなす。

言語の定型性は、大規模コーパスを利用した言語分析が可能になったことを契機とし、言語獲得やリアルタイムの言語運用の仕組みへの関心と相まって、その重要性が再認識されることとなっている、しかしながら、具体的な個々の研究においては(対象とする領域)や(定型を構成する言語形式)に制約を設けることなく広く扱うために、その雑多性・多様性が前面にでてしまい、結果としてパターンの列挙・分類が主になるものが多い。定型性研究の文献では、このことを冒頭で嘆くことから始まる。例えば、Wray (2000)では、定型的表現を指す用語として当時で実に 46 の表現が様々な論者によって使用されている、と指摘している。

本研究では、分析対象とする領域に関しては、英語の SL の中でもとくに双方向で進行する談話に限定し、さらに定型の構成体として「機能語類から成る連鎖」という制約を設ける。これにより雑多性を押さえ、多様性を制限して、SL の特定領域における定型性の働きとその背後にある原理を探る。

## 2. 研究の目的

従来の定型性研究では SL/WL のモードを区別せず、様々なジャンルを調査・分析とすることが多かった。それは定型性の広範囲な存在を示すことが目的であったためであったと言える。現在では一部の論者を除き、言語の定型性の遍在性を否定するものはいない、思う。遍在性を自明の事実とした場合、定型性研究の課題は、概略すると、(1)「どの言語領域に、どのようなパターンがあるのか」、(2)「そのパターンの背後にある原理、そして、それを利用する理由/起因はなにか」といったことである。

これを踏まえて、本研究での学術的な問いを言えば、話し手と聞き手が時空間を共有する状況での双方向のリアルタイムでの言語使用(以下、「場面のある談話」)において、有限数の機能語と内容語を最大 1 語含む語連鎖という限定的な形式を見出し、それがどのような役割を担っているか(背後の原理の発見)。そして、なぜその限定形式が場面のある談話で多用さ

れるのか(原因/起因の発見)、ということになる。

### 3. 研究の方法

場面のある談話という場合、本来は母語話者の自然な対話を録音するなどして資料を収集すべきであろうが、日本にいてそのような資料を集めることは至難の業であり、また、個人情報に係わる法令に違反する可能性もあり、現実的ではないと判断して、英語ラジオドラマのスク립トを利用することにした。実際のところ、ラジオドラマは映像がないことから、話し手の心的な発話が(若干人工的ではあるが)言語化されているという特徴があり、非母語話者の研究者の視点からは、むしろSLの研究にふさわしいものである、と考える。

本研究では定型性の構成体として主として(機能語(function words)から成る語連鎖)を扱う。ただし、対象とする連鎖を機能語のみから成る連鎖(e.g., Here you are, That's what it is!)に限ると、範囲が極めて限定されてしまい、結果的に重要な働きを見失う可能性があるので、二つの拡張形式を加える。一つは、固定した内容語を最大1語まで含む連鎖(以下、「C1FN連鎖」)(e.g., I tell you what, It's just that....)であり、もう一つは、機能語連鎖の中に任意の内容語が入る空白部を持つ連鎖(以下、「スロット連鎖」)である(e.g., That's N for you: コメント文「...てそんなもんさ」)。また、これが二つが合体したもの(e.g., Don't you go V-ing!:「冗談的禁止」「...なんてしないでよね」)も対象とする。このように拡張すると、機能語だけからなる連鎖ではないので、説明の便宜上「機能語類連鎖」と総称する。

本研究の目的は、英語ラジオドラマのスク립トを基に自作したSLのコーパスデータを利用して、場面のある談話で繰り返し現れている機能語類連鎖を判別・抽出し、その一次的意味だけでなく、出現しているコンテキストでどのようなメタレベルの役割を担っているのかを解明して、従来の定型性研究では構成体として認識すらされなかった機能語類連鎖に関する基盤的な研究を行う。

### 4. 研究成果

研究成果として、申請者がいくつかの論考でまとめたことであるが、機能語類連鎖という構成体の確定の仕方、機能語類連鎖の場面のある談話の中での働き、また、SLの構造面の特徴を分析した澤田(2016)において扱われなかった課題を機能語類連鎖という概念装置と関連付けて述べてみる。

まず、本研究は定型性研究に機能語連鎖という概念を導入するので、機能語とは何か、という問題は避けて通れない。機能語(function words)/内容語(content words)は言語学的に最も重要な対立概念の一つであり、その実在性は外国語を学ぶ(あるいは教える)ときに直感的に感じるものである。しかしながら、ある単一語をカテゴリーカルに機能語あるいは内容語に分けようとするときの先験的な基準はない、といってよい。

まず、思いつくのは品詞概念と関係付けることである。品詞(parts of speech)は、その名称が示す通り、「ことば(speech)」は「部品(parts)」からなり、そのパーツを「正しい位置に置けば、つまり正しく配列すれば、意味を成す文として成り立つ、と考える言語観に依っている。逆に、文のパーツである品詞が文構造の正しい位置に置かれていないと機能しない、つまり意味が通らない、ということである。これは、自動車とその部品の関係と全く同じで、基本的に品詞論は言葉と機械とに相同性を認める機械論的な考えを根底にもつ。品詞にはメンバーが開かれている主要4品詞(名詞、動詞、形容詞、副詞)とメンバーが閉じられている非主要品詞(冠詞、代名詞、前置詞、接続詞等)に大別できる。言葉は思考を表す手段であり、人の思考の広がりには制限がない。ならば主要4品詞は人の思考の表出に直接的に関わるので、そのメンバーには制限がない、と考えるのが自然である。一方、非主要品詞は主要4品詞を組み込みながら文構造を作り上げていく働きを担っており、その意味でメンバーは制限的である、と考えられる。このように考えると、内容語は主要4品詞の語群に相当し、機能語は非主要品詞の語群

に相当する、と一応いえる。しかし、単一語 like を考えてみればすぐわかるように、語は文の置かれる場所で品詞区分が変わる。また、歴史的にも冠詞や代名詞は名詞を起源としているものもある。品詞は文構造の位置の違いと概念上同義のため、品詞のラベルは個々の語彙で決まっているわけではない。つまり、品詞を基準に内容語・機能語を区別することはできないのである。

それでは、個々の語彙の出現頻度を基準とするのはどうであるか。出現頻度は構造とは全く関係ない。文法的な働きを担う語類は、その特性上、同じ語が繰り返し使用される傾向にあるはずで、そのため出現頻度が高くなる、と考えられる。他方、伝達したい内容に関わる語は token として見た場合、その出現頻度は低くなるであろう。すると、出現頻度が低いものは内容語、出現頻度が高いものは機能語に分類できる、と予想される。しかし、語彙を出現頻度に並べて、それを基にして機能語/内容語を区別しようとする、結局は cut-off ラインの置き方がらりと変わってしまう。典型的な機能語であると思われる前置詞にも出現頻度が低いものもあるし、動詞にも go, come, make など出現頻度が非常に高いものがある。品詞や出現頻度の一方だけでは、機能語と内容語の区分の直感を反映しない。

このような分析から、澤田(2022)では、機能語を品詞と出現頻度の折衷で捉えることにした。折衷的な基準で設定した語群は伝統的な意味での機能語類と異なるので、《機能語類》と呼ぶ。例えば、機能語が文法的な働きをする、というのであれば、文法の基本的な単位である文の基幹を支える動詞という品詞が機能語から除外してしまう。結局は common verbs は、動詞であっても、繰り返し使われるからこそ機能語的な特性を帯びるので、commonness の程度が高ければ(つまり、出現頻度が高ければ)、機能語類に入れる方が内容語と機能語の区別の直感をよく反映する。

澤田(2022)では、折衷的な基準を設けて機能語類を定めて、その組み合わせから構成され、かつ繰り返し現れる語の連鎖を《機能語類連鎖》と総称し、自作コーパスデータからなる場面のある談話で発生している機能語類連鎖について論じた。

また、澤田(2016)の第二章では、SL に広範囲にみられる四大特徴として「状況省略」、「タグ表現」、「場面に密着した表現」、「強意表現」が挙げられている。同書では、この四つの言語現象をバラバラに列挙して、その間の関連を述べなかった。それは同書が WL と比較した SL の構造的な特徴の啓蒙書であったからである。そのため、この四つが広く SL において頻出するのか、という本質的な問いについては触れていない。

機能語類連鎖という構成体はこの問いに解答を与える。これら四つは基本的に機能語類連鎖に係わるものとして統一的に取り扱うことができるからである。まず、状況省略では、どのような語連鎖も消失するわけではなく、冒頭の機能語連鎖だけが消失する、と言い換えることができる。タグ表現は、定義上、主節の主語と照応する代名詞と第一助動詞で構成される語連鎖であるから、定義から機能語連鎖そのものである。この二つは機能語「類」連鎖と言うより、機能語だけの連鎖、機能語連鎖で範型化の程度が高い。他方、場面に密着した表現とは、人の経験には日常的に繰り返し遭遇する場面があり、それに応じて出現する言語表現のことである。人の日常的な経験は人それぞれで異なるのではなく基本的に一様である。そのため一定の言語表現類が日常的な生活と結びついて、容易に固定化・範型化される。そこで新規・新奇な表現が使用されれば逆にスムーズなやり取りの妨げになる。同じ表現が繰り返して使われるために固定化・範型化し、そのような定型的な表現は高々1語の内容語を含む機能語類連鎖である場合がほとんどである。また、強調表現という例も、"This is a mad house. That's what it is!" のような機能語類連鎖を想定して述べたもので、ここでも、機能語類連鎖の形式の範囲に収まる。最後の二つは、もちろん、段階的なもので、内容語を複数含む場合も当然あり得るが、その分だけ場面での汎用性が低くなり、固定化・範型化の度合いも低くなる。ある種の機能語類連鎖は強調表現として汎用性が高い。

このように考えると、澤田(2016)でバラバラに捉えられた SL の構造面の四大特徴は、機能語

類連鎖という本研究で導入された新しい理論構成体で一元的に捉えられることになる。また、本研究報告の提出時点では諸般の事情で出版されていないが、『英文法を活かす』（開拓社言語・文化叢書、出版予定）に所収される「学習文法からみた Spoken Language」では、澤田（2016）で指摘したことに加えて、SL にのみ存在する言語形式である「応答」と機能語類連鎖の関連についても言及した。応答という言語行為は、一方向的である WL には存在せず、話し手と聞き手が双方向的でリアルタイムで進めるやりとりでのみ存在する。中学レベルの、yes, it is に始まって、It sure does, You're right, You said it! など、繰り返し出現する応答の定型的な表現はほとんど機能語類連鎖である。

機能語類連鎖という構成体が場面のある談話でどのような役割を担っているか、という問いに対しては、機能語類連鎖とは日常的に遭遇する場面で学習によって記憶された語連鎖で、それが定型化・範型化されているがゆえに、場面のある談話におけるスムーズなやりとりの成功を支えている、と答えることができる。

最後に機能語類連鎖が場面のある談話で多用される理由について記す。内容語/機能語の対立は言語学的には最も大切な対立概念であると述べた。しかしながら、その対立は本来個々の語彙で指定できるものではなく、語という単位を超えたレベルでの内容/機能の対立に起因する。それは「言葉で何かを伝える」ときの本質的なメカニズムに由来する。人は運搬したいモノをトラックや船などの運搬の道具に乗せて「運ぶ」。そこでは、運搬したいモノは多様に変化しても、運搬具は使いまわされる。これと同様に、言葉で思考を伝える時のメカニズムは、「伝えたい内容」があれば、それを「運搬具」に載せて運ぶしかない。いずれもそろっていないと伝わらない。言語においては、この時の運搬具は機能語という単一語が担うのではなく、機能語類連鎖が担うのである。例えば、何かを人に頼むとき、頼みたい内容を何らかの言語装置に載せて伝えなければならない。つまり、頼みたい内容とそれを伝える形式がある。伝えたい内容は無限に変異するが、伝える形式はトラックや船のような運搬具である。例えば、Could you ...? I wonder if you could ....., Would it be possible for you to ....?等は、依頼を表すときに繰り返して現れる言語形式で運搬具であり、これはすべて機能語類連鎖である。一方、[...]で表される空白部は頼みたい内容に関わり、人の頼みたいことに制限がないように、この表出形には制限がない。依頼は、人と人の関係の中で発生する対人関係行為であるが、このような対人関係行為は人が日常的に繰り返して遭遇する場面に起因するもので、その場面は原則として有限の場面状況である。このような有限の状況に対応して、それぞれの状況で伝えたい内容を効果的に聞き手に運ぶ言語装置が機能語類連鎖なのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 澤田茂保	4. 巻 27
2. 論文標題 話しことばでの機能語類連鎖の働きについて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 言語文化論叢	6. 最初と最後の頁 1-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 澤田茂保	4. 巻 26
2. 論文標題 会話文の文法論 TOEIC 会話問題の言語学的分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 言語文化論叢	6. 最初と最後の頁 33-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 澤田茂保	4. 巻 28
2. 論文標題 穴埋め問題の文法論 TOEICの設問分析ー	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 言語文化論叢	6. 最初と最後の頁 1-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------